

## 書物としての『百科全書』

——十八世紀ヨーロッパ『百科全書』異本ネットワーク——\*

逸見龍生（新潟大学）

\*

デイドロランベール『百科全書』パリ・オリジナル版のほかに、イタリアとスイスなどを中心にヨーロッパ各地で同『百科全書』の異本が刊行されたことは以前より知られていました。しかし『百科全書』研究において、これら異本の存在が具体的に注目されはじめたのはようやくここ近年のことであつて、おおよそ一九八〇年代のなかば、研究が活発となつたのは九〇年代を経てからにすぎません。オリジナル版のみではなく、その異本・異書 (contrefaçon) や、意図的な編集や加筆、抜粋がされたほとんど改作に近いような周辺の・二次的テキスト<sup>[1]</sup>にも関心が広がつたのは『百科全書』のみならず近年の十八世紀文学・思想研究の大きな流れであり、その理由のひとつには、アンシャン・レジーム期における〈書物〉と〈読書〉という具体的に日常的な実践を核とする文化の受容経験にたいして、とくにアナル派以後の欧米の文化史研究の成果の蓄積がすすんだこと、それにほぼ対応するようにして、文学や思想など隣接領域の研究者のまなざしに変化してきたことなどが挙げられるでしょう。ここでは、これまで日本では注目されることの少なかったと思われる『百科全書』諸刊本の印刷刊行をめぐる状況や各刊本の特徴とその相違に主に論点を絞り、以下のような順序でお話ししていきたいと思ひます。まず、(一)『百科全書』パリ版の写真を参照しながら、『百科全書』研究史について簡単に振り返っておきます。(二)次に、今度は異本の写真を紹介し、各異本の特徴、パリ・オリジナル版との違いについて述べます。なお、皆さんにお見せする写真は、基本的にすべて慶應義塾大学に所蔵してあるものを撮影したものです。

\* 本稿は、二〇〇五年十月に名古屋大学図書館・十八世紀学会主催で行なわれた講演会「知の万華鏡——書物を通してみる十八世紀の西洋と東洋」において、筆者の行なつた講演原稿をもとに、これに加筆したものである。当講演会の開催にご尽力下さつた、名古屋大学の長尾伸一教授、同大学附属図書館研究開発室秋山晶則助教、同研究員福田名津子さんに感謝する。



『百科全書』の正確なタイトルは『百科全書、あるいは学問と技芸・工芸の総辞典』といい、著者名欄には「文学者の協同体 *une société de gens de lettres*」とあります。《gens de lettres》というフランス語は、ここでは「文学者」と近代的な意味で訳すよりもむしろ、専門分化が進む以前の総合的な「文人・知識人」と訳した方がよいでしょう。こうした表現に、この『百科全書』とは、王立学問所にも大学の枠にも入らず、既成の学術団体にも所属しない市井の知識人たち——数学の領域ですでに輝かしい業績を挙げているダランベールはともかく、『百科全書』刊行当初のデイドロはまったく無名の青年にすぎませんでした——の、自由で開かれたソサイエティがつくり出す、新しき知の総体を呈示する巨大な辞書なのだ、という自負がみられるといつてよいでしょう。私のフランス留学時代の先生であったパリ第七大学のジョルジュ・ベンレカツサ教授は、デイドロこそは貴族や宮廷に依存しない、政治的にも宗教的にも自主独立の気概でやっていったフランス史上初のインテリゲンチヤだとよく言っていました。

『百科全書』はこうした自由知識人の相互のつきあい、交際のなかで生み出された協働の賜物であるばかりではありません。『百科全書』の扉絵 (*frontispice*) (図2) を見てください。真理が光り輝きながら迷妄のメタファーである闇と雲を追い払っているという有名な寓意画です。理性、記憶、想像力、神学、哲学、古代史、近代史、時から金銀細工、織物職にまでいたる二七名の人物がこの寓意画には描かれており、その全貌は慶應義塾大学の鷺見洋一教授により解説されています。この扉絵が表わすように『百科全書』は知識と技術の協働にこそその理念としての新しさがあるといふことはよく知られております。

ここで注目したいのは、この扉絵を描いた画家コシヤン、そして扉版画 (*the grave*) や各巻冒頭の挿絵 (ポードー)、本文中の装飾文字 (オーナメント) など多くの箇所では版画を彫り起こした当時のパリ木版職人の大親方パピヨンらを始め、いわば手仕事の領域で活躍した様々な職人、工芸家たちが数多く『百科全書』の制作過程で結集しているということです。デイドロ自身が何よりも誇ったもの、そして『百科全書』刊行直後から同時代の読者からも激賞されたもの、それは職人たちの工房でデイドロも含め編集スタッフが実際に見聞きした数々の職人たちの技を、この新しい辞書に生きた情報として組み込んだその現場性でした。職人たちが自身が筆を執った項目もあります。『百科全書』とは、デイドロの好んだ表現を借りるなら、世界の探求に不可欠なふたつの領域、精神の領域と手の領域との巨大な「哲学的共闘・同盟関係」の結実であったのです。

## 巨大な出版事業

それにしても巨大な事業でした。表紙の頁下方には、『百科全書』出版事業を企画・実行したル・ブルトンを含め、ル・ブルトンと協同したリアソン、ダヴィド、デュランと、四つのパリの書店の名が記載されています。このパリ・オリジナル版は彼ら出版業者にとっても、一世一代の大事業でした。それは発行部数の点でも、彼らが最終的にえた売上金額においても、『百科全書』がやはり同時代の書物と比較して群を抜いていたことからわかります。『百科全書』は三巻まで当初二〇五〇部が刷られ、その後二度増刷されて最終的には四〇〇〇部を越えるプリントが刷られています。この数がどれだけ大きなものだったか知るには、同時期のヨーロッパで最大のベストセラーだったルソーの小説『新エロイズ』の刊行部数と比較してみるとよいでしょう。

『新エロイズ』は、当時のパリの風俗をよく観察した作家ジャン・セバスチャン・メルシエによると、この小説を買おうと人びとがあまりに各地の書店に殺到したため、しかたなく書店の店頭で一冊の本を半分に裂いて一冊を二人の読者に持ち帰ってもらったといういわく付きの、近代小説史上初の大ベストセラー小説ですが、この小説は当初二〇〇部、後に検閲削除された部分を復刻して新たに二〇〇〇部、合計四千部出ています。もちろん、『新エロイズ』には無認可のコピーや海賊本が夥しく出回ったそうですから、『百科全書』パリ版の発行部数と同列には論じられません。しかし、やはり『百科全書』は相当の部数が刷られたといつてよいでしょう。

またこの頃は印刷の刷りの工程においてまだ動力機械が導入されておらず、手作業で一枚ずつ職人が刷っていました。『百科全書』は総頁二万五千頁ですから計算すると一億頁、フォリオ（二ツ折）版で五〇〇〇万葉が刷られたことになります。フランス十八世紀を対象にした書物の社会史のある研究者によると、当時おおよそ刷りには熟練技術者二人ひと組で紙一葉片面につき一日二五〇〇葉分ほど印刷できたといっています。これは一五秒で一葉片面を刷り上げるといふスピードになるそうです。単純に計算しても、無休で毎日二人が同じペースで一台のプレス機で印刷したとして二万日、年数に計算しても五五年かかる。この時代のヨーロッパ最大規模の印刷所のひとつ、ヌーシャテル印刷協会の工房でも所蔵しているプレス機は四台程度だったと言いますから、やはり空前の規模だといつてよいでしょう。

おそらくは複数の印刷所で刷られたはずですが、具体的にはどこで刷られたのでしょうか。ル・ブルトンらの経営する印刷所複数であろうと思われる。事実、ル・ブルトンは一七四五年の時点で大量の活字をロンドンから輸入し、相当量の紙を買い集めている。チェンバーズ翻訳という初期の企画が頓挫したあと、協働事業を友人の書店に持ちかけ、デイドロとダランベールという若手を迎え入れ、フランス版『百科全書』出版を決してル・ブルトンがあきらめなかった

のも、活字と紙という当時まだきわめて高価な商品を買いつけた彼が、このままいったら破産寸前となったからだと言われている。では具体的に『百科全書』のどの部分が、どこで印刷されたか。この点は精細な記録が見つかっていないため、不明の部分も多いのですが、協同書店主の一人ダヴィドの残した百科全書出版会計収支の記録がパリの国立古文書館に保存されているので、これを見れば若干の手がかりは掴めます。少なくとも一七六〇年代のある時期から、おそらく図版巻の印刷に関してだと思われませんが、リショーム嬢と呼ばれる人物が営む印刷所との取引記録が頻繁になっています。しかしこの点はまだ調査がそれほど進んではいません。今夏、パリの国立古文書館に通って、マイクロフィルムで保存されている会計収支の原記録を入手してまいりましたので、詳細については今後ご報告するつもりでおります。『百科全書』の印刷が例えばどんな他の書物と同じ工房でなされたのか、この点が明らかになれば、おそらく『百科全書』研究にも大きな実りがあるはずなのですが。

『百科全書』には英国の影響でフランスにも十八世紀から取り入れられた予約購読制が用いられました。当初はひと揃いで二八〇リール（この当時のパリの職人は一日平均一〜二リールほどで暮らしていたそうです）で予約購読者を募った。ただしこれは、当初は全十巻で企画されたためで、最終的に図版まで二八巻分九八〇リールまで跳ね上がります。これにより最終的に協働出版者側は二五〇万リールという莫大な純益を出した。一リールが仮に一〇〇〇円だとしても、何と二五億円ということになります。これにたいし、会計簿記録を見ると、デイドロの報酬は『百科全書』企画当初のチェンバーズ翻訳を担当していた頃は出来高払いで、平均するとひと月五〇リール（五万円）ほど、編集主幹について一七四七年頃には月額一四四リール（一五万円弱）、企画そのものが大当たりをとって書店側の利益が天井知らずの勢いになってきた刊行後半期になってようやく月額五〇〇リール（五〇万円）ほどになります。仕事量の割には何とも慎ましいというほかありません。デイドロは晩年ル・ブルトンらに対する悪口をやめることはないのです。これもむべなるかなというほかない。『百科全書』本文巻一四〇名の執筆者のほとんどが無報酬で仕事を引き受けたということも、近年のアメリカの学者カフカーの精密な調査によつてはつきりしています。これはまさに資本家側の搾取というほかない。

## 印刷資本主義の勃興と市民

十八世紀における書物というものを考えるときの、これは極端な例かもしれませんが、ひとつの傾向がここでははつきりします。『百科全書』が示しているのは、勃興する印刷資本主義というものと、新しい近代的・市民的知の生成と流通のダイナミズムが緊密に結びついているという事実です。いうまでもなく、この指摘自体は新しいものではありません。むしろ、近年『想像の共同体』でベネディクト・アンダーソンが明確にしているように、それは洋の東西を問わず、緩急のリズムの差はありながらも、世界的に普遍化していく現象だといってよいでしょう（ちなみにアンダーソンは、『言葉と権力』という著作において、十八世紀フランスのこのパリ『百科全書』と、それと少し遅れてジャワに登場した百科全書的文学『スラット・チュンティニ』との興味深い比較を、この印刷資本主義の到来以前と以後という観点から試みています）。

新教徒と旧教徒、さらに新教徒相互の宗教戦争の余波がなお続いていた十七世紀とは対照的に、刊本のみならず手稿や写本、地下出版など驚くべき多様なテキストが国境を越えて流通し、一般向け科学書や旅行記、小説などの新たなジャンルが開き、そしてそれなりに学芸的な結構を備えた定期刊行物がイギリス、フランス、イタリア、ドイツ、ベルギー、オランダ、スイスなどをはじめヨーロッパ中に出現し始めた十八世紀という時代は、まさしくロジェ・シャルチエやアンリ・ジャン・マルタンらアンシャン・レジム期書籍社会史の研究者たちが名づけたように「書物の勝利」の時代、書物が勝ちどきの声を挙げた時代でした。近年『ラディカル・エンライテンメント』と題する汎ヨーロッパ的な急進的啓蒙思想の伝播をテーマにした好著が、アメリカの研究者ジョナサン・I・イスラエルによって書かれています（二〇〇一年、仏訳二〇〇五年）、十八世紀啓蒙思想がヨーロッパ全土へ普及するそのダイナミックな運動において、近代的印刷資本主義が張り巡らした書物というメディアのネットワークと、それが生み出した新たな公衆の誕生はやはり大きかったといえるでしょう。

『百科全書』に話を戻しますと、こうした大量に作られたプリント・メディアの文化、すなわちヨーロッパ近代印刷語文化の精華として『百科全書』を見直すという観点から、一九七〇年代の終わりにきわめて重要な研究がアメリカの歴史家ロバート・ダーントンによって発表されます。何点か邦訳もありますからその著作を読まれた方もいらっしやると思いますが、残念ながら今日に至るまで未邦訳の彼の主著が、その仏訳を参考文献に挙げた『百科全書』というビジネス（原著は一九七九年）です。この研究の概要は、寺田元一『編集知』の世紀——十八世紀フランスにおける「市民的公共圏」と『百科全書』——（二〇〇三年）によってすでに日本でも紹介されていますから、ここで私が繰り返す必要は

ないでしょう。ダーントンの研究の最大の興味は、ダーントンが、『百科全書』パリ版以後、陸続としてヨーロッパ各地に現われた様々な『百科全書』異本の存在を、この近代印刷資本主義の勃興と、そしてこれら異本の介在を通じた啓蒙思想の汎ヨーロッパ的な伝播とにきわめて説得的に結びつけた点にあるのです。

## 2 『百科全書』異本

各国版『百科全書』異本  
これら『百科全書』異本のうち、パリ版を模してそれを忠実に復刻しようとした五点については、本日お渡しした資料の後ろから三頁のところに簡単なリストをつけておきました。

十八世紀後半を通じて、一七八〇年頃までの間におよそ十人以上にのぼる『百科全書』パリ版本体の翻訳・復刻企画がヨーロッパ全土でおこなわれています。ここではこれら『百科全書』パリ版以外の異本諸版について、「海賊版」なり「偽書」(リュシアン・フェーヴル、アンリ・ジャン・マルタン『書物の出現』邦訳ではそう訳されていますが)という表現で呼ぶことはせず、「異本」というより中立的な意味の用語で捉えておきたいと思えます。この当時用いられた「contrefaçon」という用語は、近年のフランス書物社会史研究も明らかにしているように、海賊版や偽書という表現が今日帯びているような法的・道義的な強い違法性や反規範性を必ずしももっておらず、しばしば不必要な誤解を招きやすいからです。

ジャック・ブルースト、そしてジョン・ラフといった『百科全書』研究の二人の泰斗は、さすがにこれら異本の重要性に早くから気づき、ヨーロッパ全域に『百科全書』の精神がいかに浸透していったか、六十年代から七十年代にかけてかなり精密に調査しています。『百科全書』の受容史において、彼らが期せずしてともに強調しているのが、ひとつは『百科全書』と同時代の夥しい定期刊行物や論駁書、擁護の書などを舞台上に繰りひろげられた、『百科全書』をめぐる数々の知識人論争の果たした役割であり、もうひとつが、フランス語のまま各国版で復刻されたこれら異本の存在でした。

異本ないし翻訳企画が企てられながら実現しなかった英国、ロシアでの『百科全書』版を除くと、フランス語で世紀後半に流布した主たる異本としては七点が数えられます。比較しやすいように表にしたのが、もうひとつのハンドアウトです。刊行開始年に従って並べ替えておきます。

これを見ますと、これまでの『百科全書』研究ではほとんど無視されてきた格好に近いこれら異本が、『百科全書』の受容という観点からみると、実は予想外に重要な役割を果たしていることがわかります。これらの異本は主にイタリア

とスイスで刊行されています。最も刊行年の早い二つのイタリア版は、ルッカとリヴォルノという、ピサに近いトスカナ地方の小共和国で出版されたもの。本文・図版ともにほぼ完全にパリ・オリジナル版を模したのですが、実は大きな違いがあります。これらイタリア版はフランスには国立図書館にすら存在せず、フランス人研究者もほとんど現物を見たことがない幻の存在に近いものなのですが、リヴォルノ版はすでに慶應義塾大学がひと揃い購入しています〔後記・二〇〇五年一月にルッカ版も同大学図書館によって購入されました〕。図3を見てください。扉絵には十八世紀の啓蒙専制君主、トスカナ大公ピエトロ・レオポルドに献辞が掲げられ、表紙下方には出版地としてリヴォルノの地名が記載されています。扉画面もパリ・オリジナル版とはまったく異なるものです。

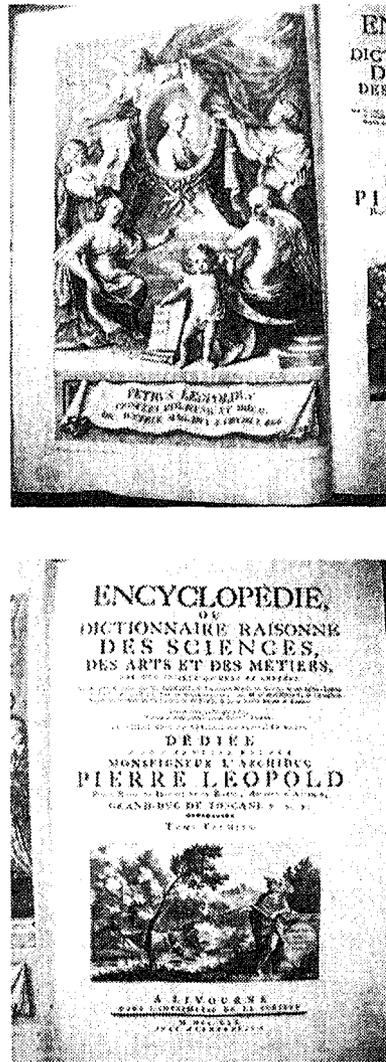


図3: リヴォルノ版扉絵(上)および表紙(下)(慶應義塾大学メディアセンター所蔵)

ルッカ版はまだ私自身も見ておりませんが、リヴォルノ版とともに、これら時を経ずして二種現われた異本の存在は、イタリアにおける啓蒙主義の浸透の深さをよく示しているように思われます。これらイタリア版『百科全書』両版にはまだそれほど研究がありませんが、手の届く範囲でそれでも研究史を辿ってみますと、本日会場にいらつしやる水田洋先生の御著書の表現をお借りすれば、フランス啓蒙とは異なる種の「思想の国際転位」がここにも起こっているようなのです。例えば、イタリア啓蒙ではまず「上からの改革」の側面がフランスよりも強調されていること、無神論者デイドロよりもむしろヴォルテールに近かったダランベールの影響がはるかに強いこと、そして『百科全書』異本刊行には小共和国の経済振興政策がかなり大きな意味をもつらしいということ、等々があげられるでしょう。とくに最後の

点は、パリ版とは明らかに異なる特徴です。

しかし何よりも興味を惹くのは、これらイタリア版二種には、『百科全書』項目の一部に関する注釈や追加項目がイタリア版編集者の手により書き込まれていることでしょう。次の写真を見てください。赤線で囲んだ箇所は、『百科全書』第一巻に収録された項目「靈魂」に関する注釈です。パリ版の項目に関して、宗教的にみてより伝統的な立場からの反駁が本文を越える分量で書かれているのがわかります。まだ全巻にわたって確認しておりませんが、第一巻をみますと、こうした長大な注釈を含め一一六個の項目注釈があり、そのうち九個のイタリア判独自の追加項目が註記のかたちで書かれています。こうした注釈を通じて、イタリア啓蒙の積極的な——時に折衷的な——『百科全書』受容の様態が浮かび上がってくると考えてよいでしょう。特にルッカ版はパリ版よりわずか遅れて刊行が開始され、三〇〇〇部と相当量を発刊しているだけに、『百科全書』のフランス国外での同時代的な普及に大いに寄与した重要な著作です。

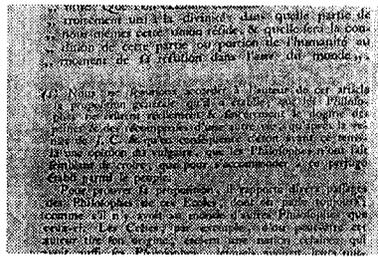
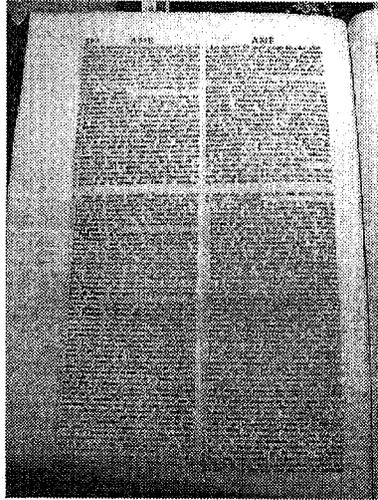


図4：リヴォルノ版項目「Ame」。同頁（上）とその注記部分を拡大したもの（下）（慶應義塾大学メディアセンター所蔵）

スイス版はいずれも、後に『系統的百科全書』の大事業を刊行するパリの新興書店主パンクックが、その刊行に関わっています。まずジュネーヴ・フォリオ版は、刊行点数こそパリ版の約半分にすぎませんが、扉絵から出版地に至るまで完全にパリ版を模したものです。名古屋大学所蔵の『百科全書』もこのジュネーヴ版だと伺っています。パリ版と混同されることの多いこのジュネーヴ版については、一九五〇年代にアメリカの研究者ジョージ・B・ワッツが複数の大学・公立図書館で『百科全書』諸版を精査し、『百科全書』本文比較研究において重要な発見をしています。やや細かい話に

ダーントンが『百科全書のビジネス』において中心に取り上げたのが、八〇〇〇部という群を抜いた大部を刊行した

Parmi les *ajutages composés*, il y en a dont le milieu de la superficie est tout rempli, & qui ne sont couverts que d'une zone qui les entoure; on les appelle *ajutoirs à l'épargne*, parce qu'on prétend qu'ils dépenent moins d'eau, & que le jet en paroît plus gros. On fait prendre aux *ajutoirs* plusieurs figures, comme de gerbes, de plües, d'évantaüs, soleils, girandoles, bouillons. Voyez PLÜIES, EVANTAÜS, GIRANDOLES, BOUILLONS, SOUCHE. (A)

Il s'ensuit de ce qui précède, que c'est la différence

H h

Parmi les *ajutages composés*, il y en a dont le milieu de la superficie est tout rempli, & qui ne sont couverts que d'une zone qui les entoure; on les appelle *ajutoirs à l'épargne*, parce qu'on prétend qu'ils dépenent moins d'eau, & que le jet en paroît plus gros. On fait prendre aux *ajutoirs* plusieurs figures, comme de gerbes, de plües, d'évantaüs, soleils, girandoles, bouillons. Voyez PLÜIES, EVANTAÜS, GIRANDOLES, BOUILLONS, SOUCHE. (A)

Il s'ensuit de ce qui précède, que c'est la différence

H h

図5: パリ・オリジナル版(上)(慶應義塾大学メディアセンター所蔵)とジュネーブ版(下)(名古屋大学図書館所蔵)の異同。第1巻241頁右、項目«AJUTAGE ou AJOUTOIR»。頁の最後の単語«différence»のハイフオネーションに注目。

なりませんが、ワッツの重厚な議論の一部だけかいつまんで紹介すると、(一)ジュネーブ版は三種類存在する。(二)古書商のあいだでもその違いは知られており、彼らのあいだで「符丁」として知られている両版の見分け方に、第一巻二四一頁最終行の最後の単語がパリ版では«différence»なのに、ジュネーブ版では«différence»となっている)の違いがある。(三)だが実際には、スベル、句読点、括弧の有無、行の最後の位置など無数の違いがある。(四)最も大きな違いは、オリジナル版には最後に«H h»としてある訂正文を、ジュネーブ版ではすべて本文にあらはじめ組み込んでいる点などが挙げられています(図5参照)。この点を含んで今日最も網羅的な研究が、一九七〇年代から公刊が開始されたリチャード・W・シュワツプらの『百科全書』目録<sup>7)</sup>で、ここにはジュネーブ版とパリ・オリジナル版の違いがリストにして掲げられています。

同年に出たさらに小型の八折版を加えると、これら『百科全書』異本の総発行部数は一七八〇年までの時点でおよそ二万部強にのぼります。これに『百科全書』パリ版の内容を相当に変更してスイス・プロテスタンティズム向けにつくら

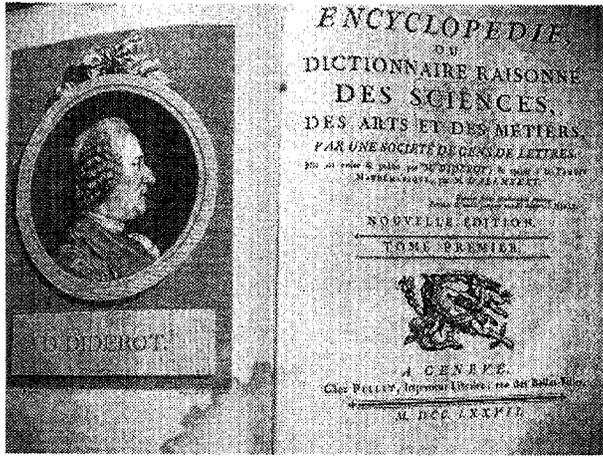


図6:スイス・クアトロ版(慶應義塾大学メディアセンター所蔵)。扉絵にはディドロの肖像画が用いられ、寓意画は採用されていない。装丁・製本ともに全体的により簡素なつくりとなっている。表紙には「新版」という文言が見られる。発行所としてジュネーヴ、プレ書店とある。

スイス四折版です。図6をご覧ください。この版は内容はそのままで判型をフォリオ版の半分のクアトロ版に変え、セット価格を一举に二四〇リールまで下げて刊行されたものです。こうした工夫によって、それまでのフォリオ版諸版に比べて、このクアトロ版は『百科全書』をフランスを中心にヨーロッパ全土へ広がり、より幅広い社会階層に向けた普及に大きな弾みをつけました。ダーントンは、この点を特に予約購読を請け負うヨーロッパ各地の地方書店のリストを調べ、精密に明らかにしています。このクアトロ版の普及分布図は、寺田先生の労作に日本語にして転載されておりますので、ここでは繰り返しません。北はモスクワから南はナポリまで、西はリスボンに至るまで、予約購読者の分布はまさしくヨーロッパ全域に及んでいます。

れたイヴェルドン版、さらにより専門化を推し進めて十九世紀以後の百科辞典の途を切り開いた『系統的百科全書』を加えると、革命までにおよそ三万部を越える『百科全書』がヨーロッパ国内外に伝播していたこととなります。

そろそろまとめに入りましょう。ダーントンが呈示したこれら『百科全書』異本への着目は、世紀後半にいかにも『百科全書』運動がフランスを越え、ヨーロッパ規模で浸透していったかを如実に示すものでした。こうした視点、すなわち、書物の受容とその伝播を軸に啓蒙思想の辿ったその多様な運命を見、そして決して均質的でも一樣でもなく、また必ずしもデイドロやダランベールといった、特権的な名に啓蒙を還元して他を切り捨ててしまうのでなく、むしろ啓蒙の様々な拡散や逸脱、変容、離散の形態に着目するということ。おそらくそれは、今日の視点から十八世紀という近代のとばぐちを振り返るに当たって、ある重要性をもっているように思います。

『百科全書』の受容史を辿ることによって、さまざまな場所、さまざまな人びとが、この書物にいかにも多様なかたちで関わったかを知ることによって、そこには、理性と光というメタファーと、あまりにも無条件に同一視されることが多い啓蒙の世紀という時代がもっていた、今日ではあるいは忘れられているかもしれない、思いがけない可能性が見いだせるかもしれないからです。『百科全書』、すなわちパイデア（知）の円環という語は、ヘーゲルが捉えたような知の絶対的な総合化とはむしろ逆に、数々の人の手を経た知のたえまない移動と転位、ずれ、離散、散布のありかたとしてこそ、その可能性を見いだせるのではないのでしょうか。

九月二十日に亡くなったジャック・ブルーストの晩年の仕事は、その意味でまさしく、国境を越えた啓蒙の転位に向けて据えられたものでした。彼の遺稿となった論文は、パリからスイス、オランダ、そして日本（大槻玄沢）へと洋の東西を超えていく『百科全書』のいわば「転生」<sup>8</sup>について書かれたものです。一方でそれは、啓蒙が世界的に普遍化し、海を越えて、新たに生まれ始めた自由知識人のあいだ共有されていく運動の軌跡であり、同時にその過程で生じる様々な変容への慈しみ<sup>8</sup>であった。

そしてもうひとつ、このような様々なかたち、具体的な多様な物質性を帯びたメディアとして『百科全書』を新たに見直すと言うこと、それは取りも直さず、書物という物質的な条件を媒介にして、それを手にした人の身体感覚のもとでこの書物が生きた世界を再現すること、その歴史的・社会的条件にまでわれわれの想像力をめぐらすということにほかなりません。

その意味で、ここで最後に思い起こしておきたいのは、やや唐突かもしれませんが、『本とつきあう法』で中野重治が戦争中に読まれた文庫本というメディアについて述べた次の一節です。中野重治は次のように書いています。「海の水の底までもたずさえられて行った無数の小型本とその持ち主とのことをもう一度思い出してみてもいい。日本全国で、友だちや愛人やが、差入れのためにあれこれと、郵送料のことも勘定に入れて小型本を包み包みしていた姿も決して忘れられぬ」。

文庫本とフォリオ版の『百科全書』を同列に並べることのおかしさは自分でも承知しているつもりです。しかしこのような身体性の記憶のなかで立ち上がる十八世紀啓蒙というものをあらためて見直してみたい。そこに、あえていうならば、アドルノとホルツハイマーが容赦ないかたちでかつてわれわれ十八世紀研究者につきつけた問いへの、おぼろげで迂遠ながらひとつの答えの手がかりが見つかるように思うのです。

## 参考文献

- ・『百科全書』異本について同時代の証言
- [1] «Lettre (\*) de M. Dutens, à M. De\*\*\* sur les différentes éditions de l'Encyclopédie», *Journal Encyclopédique*, n° iv, 1771, pp445-454.  
・ターントンの、ブルースト、リソフ
- [2] Robert Darnton, *L'Aventure de l'Encyclopédie. Un best-seller au siècle des Lumières*, Paris, Librairie Académique Perrin, 1982.
- [3] 寺田元一「『編集知』の世紀——十八世紀フランスにおける「市民的公共圏」と『百科全書』——」日本評論社、2003年。
- [4] Jacques Proust, *Diderot et l'Encyclopédie*, 1962 ed, Paris, Albin Michel, 1996.
- [5] ジャック・ブルースト『百科全書』(平岡昇・市川慎一訳) 岩波書店、1979年)
- [6] John Lough, «The Different Editions », in *Essays on the Encyclopédie of Diderot and D'Alembert*, London, New York, Toronto, Oxford University Press, 1968, pp. 1-51.

- [7] Frank A. KAFKER, ed. *Notable encyclopaedias of the late eighteenth century: eleven successors of the Encyclopédie*, Vol. 315, «Studies on Voltaire and the Eighteenth Century», Oxford, Voltaire Foundation, 1994
- [8] Richard N. SCHWAB, with the collaboration of Walter E. Rex, *Inventory of Diderot's Encyclopédie*, 6 vols, «Studies on Voltaire and the eighteenth century (80, 83, 85, 91-93)», Oxford, The Voltaire Foundation, 1971-72.  
 ・ヤタリト版三種
- [9] Ettore LEVI-MALVANO, «Les éditions toscanes de l'*Encyclopédie*», *Revue de littérature comparée*, 1923, n° 3, 1923, pp. 213-256
- [10] Franco VENTURI, «*l'Encyclopédie* et son rayonnement en Italie», Cahiers de l'Association internationale des Études françaises, n° 3-4-5, 1953, pp. 11-17.
- [11] Mario ROSA, «*Encyclopédie*, «Lumières» et tradition au 18e siècle en Italie», *Dix-huitième siècle*, n° 4, 1972, pp. 109-168
- [12] Gianmarco GASPARI, «From Encyclopedism to the *Encyclopédie*: The Italian Case», in Clorinda Donato, Robert M. Maniquis, eds., *The Encyclopédie and the Age of Revoltion*, Boston, G. K. Hall & Co., 1992, pp. 49-54.  
 ・K K K 版
- [13] George B. WATTS, «The Swiss Editions of the *Encyclopédie*», *Harvard Library Bulletin*, IX, no. 2, 1955, pp. 213-235.
- [14] Pierre RÉTAT, «L'âge des dictionnaires» in Henri-Jean Martin, et Chartier, Roger, ed. *Histoire de l'édition française. Tome II: Le livre triomphant. 1660-1830*, Promodis, 1984, pp. 232-241.
- [15] Jacques PROUST, «Sur la route des encyclopédies: Paris, Yverdon, Leeuwarden, Edo (1751-1781)», in *Encyclopédie d'Yverdon et sa résonance européenne. Contextes - contenus - continuités*, Genève, Paris, Slatkine, Diffusion France: Honoré Champion Éditeur, 2005, pp. 443-468

(一)ト入ノキ入・ノシ一ノ版の contrefaçon の製法は、cf. Anne SAUVY, «Livres contrefaits et livres interdits», in Henri-Jean Martin et Roger Chartier, *Histoire de l'édition française. Tome II: Le livre triomphant. 1660-1830*, Fayard, 1990, pp.232-241; *Les presses grises. La contrefaçon du livre (XVI<sup>e</sup>-XIX<sup>e</sup> siècle)*, textes réunis par François MOURREAU, Paris, Aux amateurs de livres, 1988. 書に匹敵する Silvio CORSINI, «La contrefaçon du livre sous l'Ancien Régime», in François MOURREAU, *op.cit.*, pp.22-37.

- (2) 『百科全書』寓意画の解説を含めた『岩波セリナーブックス』として岩波書店より近刊予定
- (3) cf. Jacques RYCHNER, «Le travail de l'atelier», *Histoire de l'Édition*, *op. cit.*, pp.46-70.
- (4) *Comptes de la société constituée pour l'impression du Dictionnaire de Chambers et Harris*. [Archives nationales 蔵本番号 U\*1051]. 1) 蔵本はルイ・フィリップ・メソジエが1938年に翻刻された。cf. Louis-Philippe MAY, «Histoire et sources de l'Encyclopédie d'après le registre des délibérations et de comptes des éditeurs et un mémoire inédit», *Revue de synthèse*, n° XV, février 1938, 109 p. 2) かし、メソジエの翻刻には間接的が指摘されている。この点については、逸見龍雄『百科全書』を讀む——本文研究の概観と展開』(二〇〇五年三月、『欧米の言語・文化・社会』(新潟大学人文学部「ヨーロッパの基層文化と近代」プロジェクト) 39-92を参照。)
- (5) Jacques PROUST, *L'Encyclopédie*, Librairie Armand Colin, 1965 (法蘭西・中三旗1版『百科全書』再発書世(一九七九年)。並行第六巻を参照。 John LOUGH, «The Different Editions», in *Essays on the Encyclopédie of Diderot and D'Alembert*, London, New York, Toronto, Oxford University Press, 1968, pp. 1-51.
- (6) 1) の点については、この論文が註記している。 Mario ROSA, «Encyclopédie, «Lumières» et tradition au 18<sup>e</sup> siècle en Italie», *Dix-Huitième Siècle*, n° 4, 1972, pp.109-168.
- (7) George B. WATTS, «The Swiss Editions of the *Encyclopédie*», *Harvard Library Bulletin*, IX, n° 2, 1955, pp. 213-235.)
- (8) Jacques PROUST, «Sur la route des encyclopédies: Paris, Yverdon, Leeuwarden, Edo (1751-1781)», *Encyclopédie d'Yverdon et sa résonance européenne. Contextes - contenus - continuités*, Genève, Paris, Slatkine, Diffusion France: Honoré Champion Éditeur, 2005, pp. 443-468.

版	発行地	判型	本文巻数	本文巻刊行年	図版巻数
パリ版	パリ「ニューシャテル」	フォリオ	17	1751-1765	11
ルツカ版	ルツカ(イタリア)	フォリオ	17	1758-1771	11
リヴォルノ版	リヴォルノ(イタリア)	フォリオ	17	1770-1775	11
ジュネーブ版	ジュネーブ	フォリオ	17	1771-1774	11
スイス $\neq$ 折版	ジュネーブ・ニューシャテル	クアルト	36	1778-1779	3
スイス $\infty$ 折版	ベルン・ローザンヌ	オクタヴオ	36	1778-1782	3
イヴェルドン版	イヴェルドン	クアルト	42	1770-1775	10
系統的百科全書	パリ	クアルト	157	1782-1832	53

表1 『百科全書』異本比較表1

版	図版巻刊行年	補遺巻数	補遺刊行年	価格(リーブル)	仏国内予約講読数*
パリ版	1762-1772	5	1776-1772	980	2000
ルツカ版	1765-1776	0		737	250
リヴォルノ版	1771-1778	5	1778-1779	574	0
ジュネーブ版	1770-1776	0		840	1000
スイス4折版	1778-1779	0		240	7257
スイス8折版	1778-1782	0		225	1000
			計		11507
イヴェルドン版	1775-1780	6	1775-1776		
系統的百科全書		0			

表2 『百科全書』異本比較表二

版	仏国外予約購読数*	計
パリ版	2050	2050
ルッカ版	2750	2750
リヴォルノ版	1500	1500
ジュネーブ版	1000	1000
スイス4折版	754	754
スイス8折版	4500	4500
	12554	12554
イヴェルドン版		1600
系統的百科全書		5000
		19154

表3 『百科全書』異本比較表三